

信州大学 正員。夏目正太郎
信州大学 正員 石川 清志

§1. ま え が き 骨組構造物全体の挙動は、各部材の棒としての挙動の集積である。今、速度に比例する部材内部減衰を考慮すると、棒の挙動とあらわす微分方程式は

$$\left. \begin{aligned} \text{たて振動: } & \frac{EA}{L^2} \left(1 + \varepsilon_0 \frac{\partial}{\partial t}\right) \frac{\partial^2 u}{\partial z^2} - \frac{1A}{g} \frac{\partial^2 u}{\partial z^2} = (Q_0 \sin pt) \\ \text{ねじり振動: } & \frac{GJ}{L^2} \left(1 + \varepsilon_0 \frac{\partial}{\partial t}\right) \frac{\partial^2 \phi}{\partial z^2} - \frac{JA_2}{g} \frac{\partial^2 \phi}{\partial z^2} = (Q_0 \sin pt) \\ \text{たわみ振動: } & \frac{EI}{L^2} \left(1 + \varepsilon_0 \frac{\partial}{\partial t}\right) \frac{\partial^2 w}{\partial z^2} + \frac{EA}{g} \frac{\partial^2 w}{\partial z^2} = (Q_0 \sin pt) \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

であり、これらの解は、齊次解と特解との和からなるものとし、たわみ振動は2方向のたわみが考えられる。強制振動解析を固有マトリクス法で扱うときは、齊次解と特解も(1)における外力作用と示す右辺と除い

た型の微分方程式を解き、特解の中に外力を導入するために、荷重マトリクスを計算して必要に応じて、固有マトリクスに加えて状態量を算出することになる。

$$\text{齊次解状態量: } W_h(t) = D_1 R_1(t) N_1 e^{i\omega t}, \quad \text{特解状態量: } W_p(t) = D_2 R_2(t) [N_2 + \langle K \rangle] \sin pt \quad (2)$$

D : 物理的係数マトリクス, $R(t)$: 座標特性マトリクス, N : 固有マトリクス, K : 荷重マトリクス,

固有マトリクス法で強制振動を解く場合には、第1に、齊次解を用いて自由振動の固有値を求め、それが定まった時点で未定定数群と1つの未定定数で示す、いわゆる比の値として表現しうようにする。第2は、特解を用いて外力と境界条件により、未定定数を1つ固有マトリクスを既知の型にする。これにより、任意変、任意時刻における状態量を算出出来る。第3の手順としては、第1にて未定定数としてまだ1つ残されたものを既知にする必要がある。これに初期条件が導入されるのであるが、第2の手順で求めた状態量と一緒にして考えることにより、すべての未定定数が既知となり、振動時の状態量と表わすことが出来る。

$$W(t) = \sum_j D_{1j} R_1(t) P_j(\omega_j) Q_j e^{i\omega_j t} + D_2 R_2(t) [N + \langle K \rangle] \sin pt \quad (3)$$

§2. 移行演算 骨組構造物は、各節点で接った部材が接合されている。全体的挙動と表わすにしても、各節点における変位の連続性と、力の平衡条件を満足していなければならぬ。このことは、各節点にて考えらるるので、全節点で同時に式を立てたらよいのであろうが、各節点で移行演算を行い、逐次消去の手法にて漸化式にして、境界条件で固有値を決めたり、固有マトリクスを決定する。移行演算には各節点で2本の式が必要である。部材が2本だけならば、丁度、変位の連続と力の平衡として2本の式が得られて余す所がないが、3本以上の部材が接続している節点では、変位の連続性を示す式が残る。漸化式に参画出来ない。これら剰余の式は平衡条件式に入っている残った固有マトリクスの消去に用いられ漸化式も可成り簡潔化しうる。それでも変位連続を示す式が残る場合は、境界条件と同様に扱って、固有値方程式または、固有マトリクス決定に参画せると、生じた各種条件式は余すことなく使用されることになる。今 (A, B) , (C, D) , (E, F) とそれぞれ組として 移行式をかける。

$$\begin{bmatrix} R_1 & 0 \\ 0 & R_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_1 \\ Z_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} T_1 & 0 \\ 0 & T_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_1 \\ X_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} F_1 \\ F_2 \end{bmatrix} Y_1 + \begin{bmatrix} 0 \\ \langle F_2' K \rangle \end{bmatrix}; \quad \begin{bmatrix} A_1 \\ A_2 \end{bmatrix} Y_1 = \begin{bmatrix} S_1 & 0 \\ 0 & S_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_1 \\ Z_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ \langle A_2' K \rangle \end{bmatrix} \quad (4)$$

$$\begin{bmatrix} R_3 & 0 \\ 0 & R_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_3 \\ Z_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} T_3 & 0 \\ 0 & T_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_3 \\ X_4 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} F_{x1} & 0 \\ 0 & F_{x2} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_1 \\ X_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} F_2 \\ F_2' \end{bmatrix} Y_2 + \begin{bmatrix} \langle F_{x1}, K_{x1} \rangle \\ \langle F_{x2}, K_{x2} \rangle + \langle F_2', K_{y2} \rangle \end{bmatrix}; \begin{bmatrix} A_2 \\ A_2' \end{bmatrix} Y_2 = \begin{bmatrix} S_3 & 0 \\ 0 & S_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_3 \\ Z_4 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ \langle A_2', K_{y2} \rangle \end{bmatrix}$$

$$\begin{bmatrix} D_1 & 0 \\ 0 & D_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_1 \\ X_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} D_3 \\ D_4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_3 \\ X_4 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -\langle D_1, K_{x1} \rangle \\ -\langle D_2, K_{x2} \rangle \end{bmatrix} \quad (\text{移行演算, 固有マトリクス消去に参照(1)の式}) \quad (5)$$

$$\begin{bmatrix} R_5 & 0 \\ 0 & R_6 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_5 \\ Z_6 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} T_5 & 0 \\ 0 & T_6 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_5 \\ X_6 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \langle T_5, K_{x5} \rangle \\ \langle T_6, K_{x6} \rangle \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} F_5 \\ F_5' \end{bmatrix} Y_5 + \begin{bmatrix} 0 \\ \langle F_5', K_{y5} \rangle \end{bmatrix}; \begin{bmatrix} A_5 \\ A_5' \end{bmatrix} Y_5 = \begin{bmatrix} S_5 & 0 \\ 0 & S_6 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Z_5 \\ Z_6 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ \langle A_5', K_{y5} \rangle \end{bmatrix} \quad (6)$$

(4), (5), (6) に見られるように鉛直材方向に移行させ, $A'_1, B'_1, \dots, F'_1$ における支持境界条件へ導く意図である。Y方向部材の固有マトリクスを消去して, 鉛直部材の状態量へ混入させXを以て最終固有マトリクスとする。支持境界条件式は

$$B_1 Z_1 = \langle B_1, K_{x1} \rangle; B_2 Z_2 = \langle B_2, K_{x2} \rangle; B_3 Z_3 = \langle B_3, K_{x3} \rangle; B_4 Z_4 = \langle B_4, K_{x4} \rangle; B_5 Z_5 = \langle B_5, K_{x5} \rangle; B_6 Z_6 = \langle B_6, K_{x6} \rangle \quad (7)$$

となる。Kは荷重マトリクスとあらわし, 齊次解のときは勿論なく部材の0端ではKは入らない。故に(4), (5), (6) を解いて, (7)へ代入することにより, 齊次解からは固有値方程式を得る。

$$H(\omega) X_n = 0, \quad X_n = P_n(\omega) \Omega_n \quad (8)$$

特解からは, 固有マトリクスXが決定されるので, 鉛直部材, 水平Y方向部材の固有マトリクスがすべて決まる。

§3. 初期条件 以上の結果特解は状態量を具体的に求められるが, 齊次解には未定値 Ω_n が残ったのである。これらを初期条件で決定する。例えば静止の状態を想定すれば, 全体座標の3方向の変位がなく, 3方向変位速度も0とすればよい。言い換えれば, 構造部材の変位を全体座標の3方向変位に換算して考えればよい。内部粘性減衰があるときは, 固有値の複素数となるので, 齊次解は状態量も複素数となり, Ω も複素数で表わされる。故に固有値がn個あれば, Ω の値, 座標を決定するには, $2n$ 個の式を必要とし, それを初期条件から作り出すのである。それには3方向の変位と変位速度をFourier sine級数でそれぞれ表示すれば,

$$\begin{bmatrix} U \\ \dot{U} \end{bmatrix} = 0 \quad \begin{bmatrix} U \\ \dot{U} \end{bmatrix} = \sum_n \sin n\pi\bar{p} \left[\sum_j Q_j \begin{bmatrix} E \\ i\omega_j \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ i \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Omega_1 \\ \Omega_2 \end{bmatrix} + b_n \begin{bmatrix} E \\ P \end{bmatrix} \right] = 0 \quad (8)$$

となり, $\sin n\pi\bar{p}$ の係数が恒等的に0になる。各項の虚部, 座標の方程式を連立させて $2n$ 元の連立方程式を得る。

$$[A] \Omega = B \quad (9)$$

ここにおいて Ω が決定されたので, 後はすべての未定定数が既知となり, 立体骨組構造物の変動を(3)で求めることができる。

§4. 計算例

高さ = 8m, スパン = 8m (連続)

奥行 = 5m, 同一断面積 = 0.64m²

断面2次モーメント = 0.03413 (m⁴)

E = 2.0 × 10⁶ t/m² (鉄筋コンクリート)

GJ = 1.28 × 10⁵ t/m², γ = 2.4 t/m³

ε = 0.00001

参考文献

谷本・石川: 演算子法構造解析 I (森北出版)

谷本・池田: マトリクス構造解析 (日刊工業)

固有値 $\omega = \omega_1 + i\omega_2$

(26.66521, 0.003555)	(180.00251, 0.162004)
(27.08063, 0.003667)	(181.38901, 0.164511)
(34.95934, 0.006121)	(182.55382, 0.166629)
(62.40677, 0.019472)	(194.39523, 0.188947)
(75.01368, 0.028135)	(201.11347, 0.202234)
(124.49087, 0.077489)	(207.61142, 0.215512)
(141.45032, 0.100042)	(225.50766, 0.254268)
(171.27289, 0.146671)	(224.64354, 0.252324)
(172.40007, 0.148608)	(226.23771, 0.255917)